

世継の歌

特60

436

088127-000-3

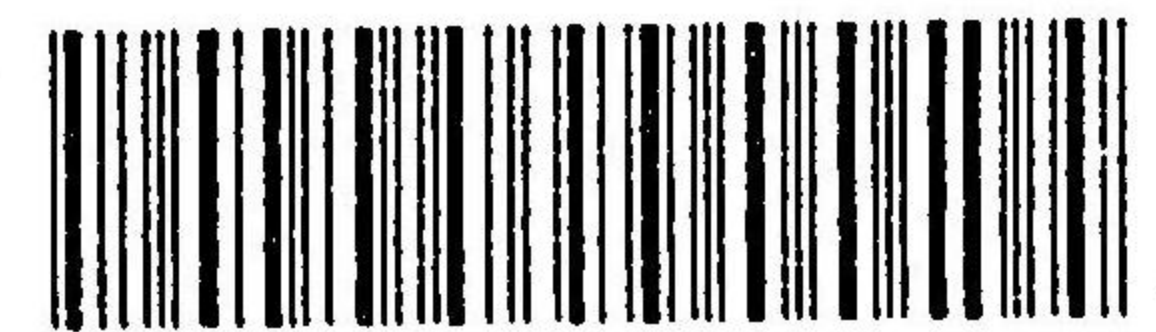
特60-436

世継の歌

物集 高見/著

M28

DBG-0225





國學院奇蹟

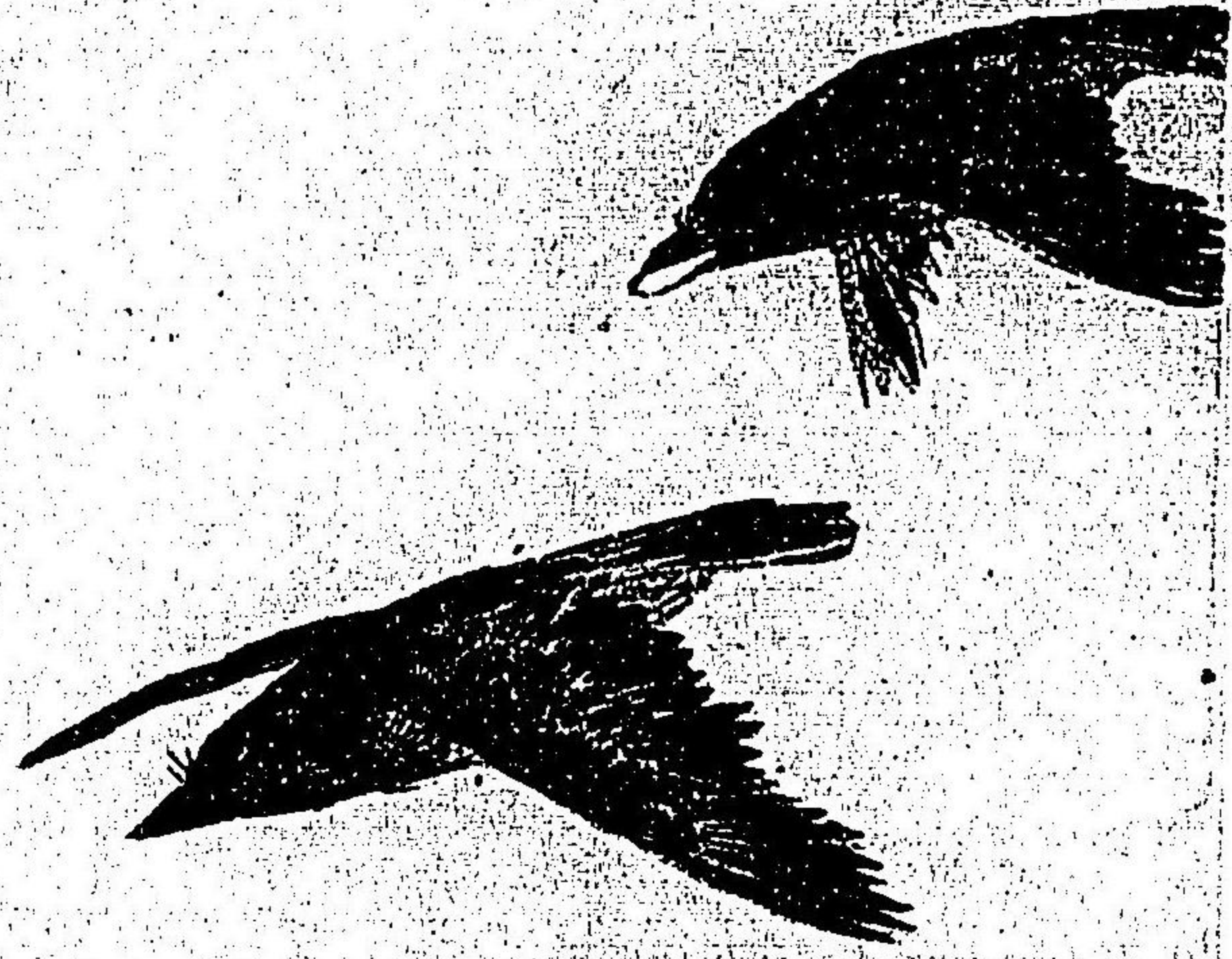
謹誌

特60
436

世繼の歌

例言

この歌は、天孫降臨よりこなた、
明治維新といさるまでの事ど
もを詠せし歌よて、日本歴史を
よみならとん兒童の爲ふ、歴代
の大勢をそらんせしめんとて
のすさびなり。



この歌の、余、十餘年前、世繼千辞
文といふを作らんとせしほど、
まづ、試み、辭數をもかぎらず、
同辭をもさけぬ、この歌を作り
しを、その後、幾度ともなくそへ
もしけづりもして、終、かうざ
まよの志なしとなり。
この歌も用ひらる、五七一連の

句數の、七百二十二句にして、辭
數の、大約、二千二百辭なり。辭句
の、文字鎖をもてつなぎ、或の、故
事をもてつなぎらるなど、あ
れば、みん入、そのこゝろせらる
べし。

明治廿七年十二月 物集高見

世繼の歌

目次

(一) 段 國がと
國ぶり

(二) 段 御代のおとめ

神武帝、鳥見の山、
崇神帝、弓彌のみつぎ、手末のみつぎ、
垂仁帝、埴輪、
景行帝、熊襲集帥、
日本武尊、草薙の劔、

成務帝、國郡のさうひ

(三) 段) 朝まつりごと

仲哀帝、
神功后宮、三韓征伐、
應神帝、文學、
仁徳帝、民のけぶり、
履仲帝、四方の筆、
允恭帝、衣通姫、甘檮のうけひ、
安康帝、山の宮、
雄略帝、葛城山の獵、蠶養、
飯豊帝、
顯宗帝、仁賢帝、室ぼぎ、

武烈帝、歌垣、

繼體帝、磐井の亂、

欽明帝、佛をがみ、

崇峻帝、麻戸の皇子、

皇極帝、斑鳩宮のなげき、法興寺の蹴鞠、

(四) 段) 難波朝のあさまつりごと

孝徳帝、大化の政、

天智帝、朝倉の宮、

弘文帝

天武帝

(五) 段) 奈良朝のあさまつりごと

元明帝、奈良の朝、
聖武帝、玄昉と廣嗣と、
孝謙帝、道鏡と押勝と、
稱徳帝、宇佐宮、

(六) 段) 平安朝のあまのりごと

桓武帝、遷都、將軍塚、延暦寺、
嵯峨帝、樂子の亂、橘皇后、うれへ
文、

(七) 段) 藤氏の世のよま

仁明帝、恒貞親王、
文徳帝、藤原良房、

陽成帝、藤原基経、

光孝帝、井川の行幸、

宇多帝、遣唐使、賢聖の障子、

醍醐帝、菅家、寒夜の御衣、

朱雀帝、將門と純友と、經基と貞盛と、

村上帝、梨壺、鶯宿梅、内侍所、

冷泉帝、御璽の箱、

圓融帝、三船の風流、二人の關白争、

花山帝、弘徽殿の女御、

一條帝、紫式部、清少納言、藤原道長、

平忠常、

後冷泉帝、前八年の軍、
後三條帝、華侈の禁、藤氏のさまとぞ、

(八) 院のまゝつりごと

白河帝、僧徒の横行、北面の武士、
堀河帝、後三年の軍、五節の舞、
鳥羽帝
崇徳帝
近衛帝
後白河帝、保元の亂、

(九) 段) 平氏の世のさま

二條帝、平治の亂、

(十) 段) 源氏の世のさま

安徳帝
頼朝、義仲、
平家の都落、一の谷の軍、
八島の軍、壇浦の軍、
鎌倉の幕府
靜の舞
曾我兄弟
實朝

(十一) 段) 鎌倉執権の世のさま

八
順徳帝、西面の武士、
承久の軍、北條義時、北條泰時、
最明寺時頼、青砥藤綱、
後宇多帝、蒙古の襲來、
北條高時、田樂、犬鬪、

(十二段) 吉野行宮の世のさま

後醍醐帝、笠置山、
楠正成、藻入形、雲のかけえし、
大塔宮、般若寺の經箱、
兒島高德、十字の詩、
名和長年、船上山の軍、
新田義貞、北條氏の亡、

足利尊氏の叛

正成の子、長年の戦死、吉野の行宮、
金崎の軍、松山の軍、義貞の戦死、
後村上帝、楠正行、
如意輪堂、四條繩子、

(十三段) 足利氏の世のさま

北朝、室町、
武家のさうえ、
公家のおとろへ、
天下一統
京都のさま、徳政、民のなげき、
應仁の亂

鎌倉の將軍

北條氏、上杉氏、

河中島の軍

毛利元就、陶晴賢、

一〇

(十四段) 織田氏、豊臣氏の世のよま

天台宗、日蓮宗、眞宗のよま

織田信長、桶狭間の軍、

明智光秀、本能寺の軍、

豊臣秀吉、備中高松の軍、

山崎の軍、賤ヶ嶽の軍、

聚樂第のちうひ

征韓

(十五段) 徳川氏の世のよま

徳川家康、關ヶ原、方廣寺の鐘、

淀君、大坂城、

江戸の政略

朝廷と諸侯と

天草のよま、天主教、種子島、

東叡山の座主

後光明帝、由井正雪、

徳川家綱の薨、酒井忠清、

赤穂の義士

文學

大鹽平八郎

一一

(十六段) 今の御代のとどめ

米國の軍艦、櫻田の變、
七卿の都落、薩摩と長門と、
鳥羽、伏見の軍、
上野、箱館の軍、

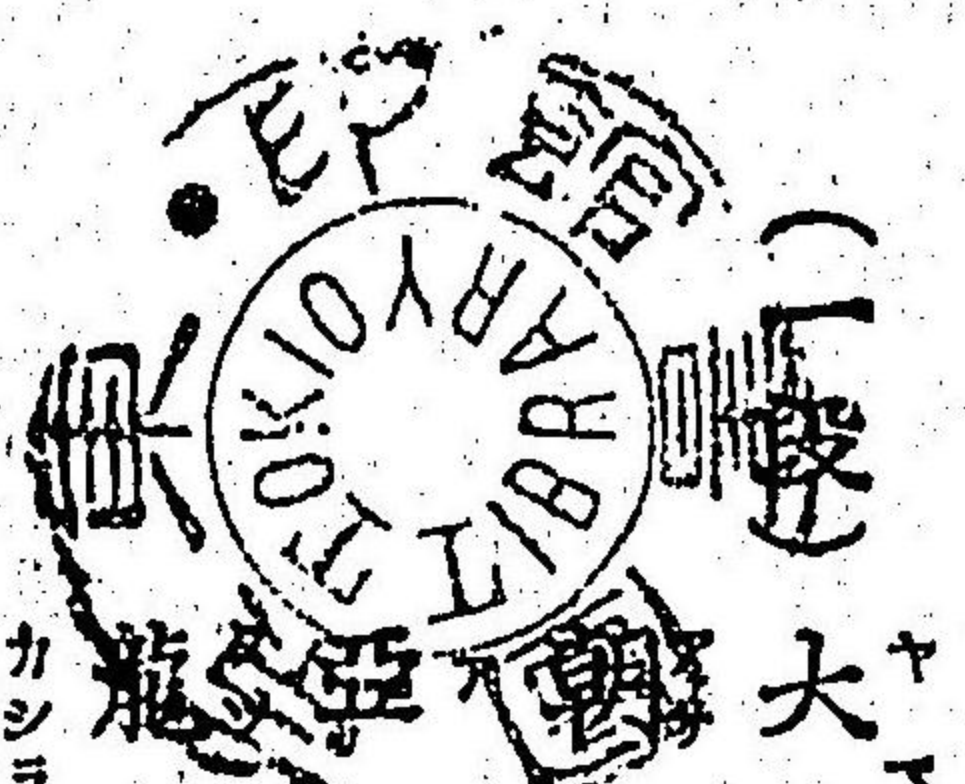
(十七段) 今の御代

王政復古
國のてどり

世繼の歌

豊後

物集高見著



大和島根の國形は
朝日夕日をさへげつゝ
細亞の海を遠蛇へる
龍も似るるくらおうみ
頭をあげてあざとさバ
太平洋ものみつべし

尾をうごうして
高麗唐土も
龍の背にのる
限りなき世を
天皇命を
四千餘萬を
四千餘萬の
代々を重ねて

さうらうバ
うちつべし
氏艸の
あろしめす
いふいきて
かぞへふり
たみくさの
こしうさを

今のうつゝも
かゝるも遠き
あなゝも仰ぐ
高きひうりも
世を浦安も
首陀も刹利も
ひとつのもてる
君よさへげて

語部の
三千年を
高千穂の
てらされて
すむ民の
匹如身も
真こころを
くれととり

(二段)

あや又尊ミき
筑波ツツの山ヤマも
御蔭ミカゲかしこき

御ミくらゐよ
蔭カゲのあれど
檀カシ原ハラの

このもかのもよ

まげりあひて

常磐トキハ堅磐カキハよ

うぶさなき

大御オホミ基モトを

馬見トの山ヤマ

富トミの小河チガハの

瑞籬ミツの

宮ミヤのさうえを

蟀コメ谷カミの

耳ミミよりきりて

眼メナコ皮カの

居イも定サまらず

まこびくる

四方ヨシのみつぎを

みさゝぎの

埴輪ハニの人ヒトの

齊イソたてぬ

御代ミヨの恵メグみも

不知シラ火ヒの

海ウミをふりくる

くまつら

熊襲クマソ集帥ダケルが

まき太刀タチの

餘波ナユのさうぎ

さむくよ

閑野の小管
劍をとるう
駿河の野火の
御稜威いたふ
吾妻のなげき
煙さびしき
さえぬ功績の
指と牙とよ

六
鏢をなみ
草薙の
あめれども
海中の
たちのぼる
能衰野も
つきよつる
道のあり

(三段)

奥のこほりの
境界のあらく
あづむ夕日を
うりぶる船の
八十舵はさぬ
千々の寶も
世々よつとへて
文のとやしよ

七
山河も
筑紫瀧
まもりつゝ
うきぶら
みぎとよの
ながれたの
鳥の跡
さく花の

にはひえならぬ
おのがてゝろと
今を春方の
かをりみちてり
民のかまどの
にぎとふ凝煙も
空よつもれる
四方の筆も

木の花の
ほころぶる
高殿も
けぶりいづる
阿麻づさひ
かつちれば
こととぎの
かゝりけん

搔上の箱の
おつるう蜘蛛の
あるしゆりしき
宮またゝすむ
もふべをぐらき
誓約かくさぬ
今にかへりて
眺望さびる

くしうらよ
ふるまひも
藤原の
人やたれ
甘檮の
氏人の
欄干の
やまのみや

むろしがふりの
むすべる夢の
ひきうへしふる
たむれはくるふ
いうりなごめし
今日の獲物と
山よの列卒の
ひらくの機

うらゝねよ
さめぬ世を
あづさ
いうりゐの
言の葉を
かづらぎの
芥たえて
あやにしき

蠶養いとなき
火焼童の
振之神棍
おくれささづつ
あむしよふる
宮みがほしき
鱒ふる鮪を
かるもの床の

むろほぎよ
うらひなす
もとすゑの
大殿を
大角刺の
歌垣よ
あさる猪の
おきよしよ

あまぎみぐれて
あぢさなき世を
ふふびてらす
磐井の清水
新羅の影も
善事悪事
ならひいぶせき
神のまうでり

常夜也
三國山
天津日
かれとて
うつらぬを
ゆきうとる
まらうとの
いなむしろ

あきて守屋も
宮の殿戸を
たてびひろぐ
さくぐる幡
かさみてほゆる
樂なめさる
空よくるひて
雲のおまし

金刺の
さしうねて
ひろむり
きぬがさよ
蘇我の子
馬なれや
みぐらをの
すさむれど

繫ツナぎもどめで
 のりかへげさる
 もろき契チギりを
 むすぶ宿世スツセの
 なく音ネかなしき
 寺テラのさへばこ
 入ヒトもなき世ヨを
 阿利アリとよびさる
 鹿ウシヤ戸ドの
 ひさで花ハナの
 總アヂ角マキよ
 さとれども
 斑イカル鳩カの
 とりしむる
 蹴クエ鞠マリの
 かへりよの

(四段)
 かへれる履ツツも
 煮魚フカのあさびて
 ふめがかげろふ
 入イル鹿カおぼるゝ
 底ソコさへみえて
 世ヨのあらまの
 子代コシロ御名ミナ代ロ
 とりくささふ
 南ミナ洲アチの
 ううぶ瀬セを
 日ヒの殿トよ
 にとさづみ
 ながれゆく
 年トシたちて
 垣カキの氏ウヂ
 からころも

なれぬ御憲を
 なのるい誰が子
 木の丸殿よ
 爪手としなく
 風のやどりを
 春よもづれる
 (五段) ながらむ瀬なく
 たし雪とのみ

つぎくよ
 朝倉や
 たつ松の
 ふきすさぶ
 三吉野の
 志賀櫻
 ちる花の
 ふる事い

そよ、鳩馬の
 奈良の都を
 咲顔とさめく
 佛法僧と
 迦陵頻迦の
 いける浄土を
 木綿付鳥も
 憂きを松浦よ

青丹よし
 毘盧遮那の
 大寺よ
 なく馬の
 こゑ妙よ
 呼子鳥
 目がとどく
 となされて

うらみを三尾よ
高御座山
弓削の河霧
まばゆくてらす
宮居かしこき
世々よながれて
御裳濯川よ
影すゝしるの

近江なる
かきくらし
こむる世を
天津日の
宇佐川の
御手洗の
すゝぎふる
童部も

(六段)

うらふ平安の
うつるう入の
春をまちえて
三葉四葉の
つくりかさねし
宮を守護の
かたきよろひて
動きなき世を

みやうつし
さなきさの
どのづくり
丸重の
形代
ひがし山
大比叡や

小比叡チヒエよいのる
四蛇シヤのかくれて
毒木ドクキをさまる
平城ナラのむうしよ
戸樞トボソの細乳ホソチ
老オシもむうえて
ときめく春ハルの
秋アキの嵯峨野サガノの

三昧ミミよ
陸奥ミチノクも
君キミが代ヨを
拍殿カヘの
ほそりよる
薬クスリ子の
とくすぎし
和草ニコクサの

もとのねざしを
末野スエノよむすぶ
ぬきつらぬる
もりべの庭ニハよ
おほしよてさる
青人草アヲヒトクサの
御門ミカドよたつの
うるうあゆの子コ

たづね来て
露玉ツユタマの
たちをなを
枝折エダオリして
をしへぐさ
あさことよ
市イチなれや
あきなぐさ』

(七段)

うれむのきむむ

下葉よかるゝ

かゝるあいしも

爪よ藍志む

ひうりをあふぐ

こゝよむすびて

末の鏡姑射よ

なげ木伐りつむ

承和菊の

ひうげぐさ

えらなくよ

染殿の

かねごとひ

水の尾の

さふれつゝ

芥川の

岸づゝひ

さむぐ世よ

小松原

とめて来て

をちうへる

小鷹狩

すゝるなる

菅原や

水のあせゝる

たの藤波の

みどり争ふ

千代の古道

いつう昔よ

行幸の跡の

尾ぶさの鈴の

道よりのいでぬ

やまと心も
かねてめでんき
たつる障子の
よさをへづてぬ
聖の御代の
まづりよつもる
さむさこの夜を
まづしき氏の

漢亭子院
賢聖の
いにしへの
かげみえて
雪もよの
いうにして
あうすうと

冬の夜床よ
御衣のこゝも
たれ濡衣を
さくついなく
さうねわかをる
去年の今夜を
夢さむがしき
猿島よさけぶ

ぬぎすべし
あるものを
きせむこの
耳無草
あさしくよ
おもひねの
をりしもあれ
ふくろふの

枯^{カラ} 齋^{サイ} すごく
 夜^ヨ 鷹^{トモ} 友^{トモ} よぶ
 ふうき水^ミ 量^{カサ} の
 よすがとなるう
 やとよびうけし
 弓^{ユツル} 弦^ヒ のひき
 敵^{アタ} をたひらの
 かねてきこえし
 つゝへきて
 伊^イ 孫^ヨ の海^{ウミ}
 みなもとの
 なりうぶら
 益^マ 荒^ス 雄^ラ の
 たうけれバ
 あらましむ
 天^{テン} 慶^{ケイ} の

みづれも今^{イマ} の
 詞^{コトバ} の花^{ハナ} の
 春^{ハル} をたづねて
 宿^{ヤド} のととひし
 櫻^{サクラ} よかゝる
 影^{カゲ} もまへへく
 主^ト 殿^{モツ} 寮^{カサ} よ
 率^{ソツ} 分^{ブン} 堂^{ダツ} の
 梨^{ナシ} 壺^{ツボ} よ
 にほへばう
 うぐひすの
 梅^{ウメ} ならぬ
 御^ミ かいみの
 たいまつ
 てるものを
 草^{クサ} がくれ

くらしとかこつ
 御稜威ミイッの志シるく
 箱ハコの雲霧クモキリ
 ひうりのなごて
 詩歌管絃シイカケウツゲンの
 三ミツの御船ミフネよ
 二人フタリあらしよ
 星ホシの位クラサの
 入ヒトのあれど
 御ミ重シムシを
 きえん世ヨの
 たて見ミびし
 風流士ミヤヒトの
 ひつべるを
 三サン台ダイの
 くらさ夜ヨよ

おくぐれいでし
 むすびもあへで
 花ハナのちりふる
 ひどりかカやく
 色イロよちなめる
 ゆうり深野フカノの
 雪ユキよかカげし
 おろしの風カゼよ
 たまむすび
 花ハナ山ヤマの
 一イチ條ジョウよ
 藤フジ壺ツボの
 むらさき
 ひめうウみ
 御ミ簾山スサヤマの
 雲クモとれて

あふげわたうき
みちさる影カゲの
祭マツリ花もこゝよ
たちまちあまち
弓ユミ張ハリ月ツキの
かよよりかくる
みるめあれさる
駒コマのアサセ淺瀬セよ

もちづきの
まとうなる
いさよひて
ふしまちの
ひんがしの
總フヂの海ウミ
落ホシ星ツキの
いさえつゝ

かへさいとほき
外ソトの濱ハマ萩サキ
吹雪フユキよむせぶ
みづれ年トシへて
ころものたての
車クルマの色イロの
御代ミヨの光ヒカリの
まじろさあふぐ

陸チ奥ウチの
をれうへり
鳥トリの海ウミ
ほころびし
絲イト毛ゲよも
みえぬまで
かゝやけバ
まむゆさよ

春日の神を
大織冠の

おらべども
たましるの

おのれくづけて
末葉志なもる

ふちそらの
多武の降

(八段)

峠またちて
優婆夷優婆塞
法師がすげむ
峰もとがれる

おこなふや
うむぐちの
くちさきも
山寺の

業火の炎

もえさてバ

こごまよたぐふ

ひとごまの

真青なる君も

きえがてよ

雨の獄舎よ

つながれて

名のみながるゝ

堀河の

世を白河よ

まうせつゝ

よどめばにぞる

金澤の

田面の雁の

みぐるれど

十布トの管薦スガゴモ
きそふ席ムシロの
志シが弄丸タマトリの
白珠シラタマ 瑠ヒタマ
これやのふと
背ソカヒよみさる
武士ブシのすがめう
五節ゴセチよりふ

三布ミフ七布ナナフ
甲カウ乙カウの
志シなさぶめ
日ヒ給タマヒの
睨ネかけて
北ホク面メンの
伊勢平氏イセヘイジ
公キン達ダチの

思オモひあがりし
翅ツバサのみえぬ
天アマの逆手サカテも
誰タレの近衛コノエを
朱器シキ臺盤ダイバンの
まの雌鳥羽メドリバよ
あさりうねる
右ミキ又マタ縷羽リウハの

空目ソラメよも
鳥羽崇徳トリバスズノリ
うさなくよ
のろふべき
とりをみも
おほえれて
雄鳥羽オドリバの
よぢれる

おどろしき世を
音よきこえし
弓雄がさけぶ
火もかなより
白河殿よ
けぶりあへぐ
恨みをのみて
志度ろもどろよ

かぶらやの
保元
遠方の
たぐすま
ながるれば
火食鳥
讃岐のや
よぶ聲の

(九段)

包なれぬる
た弓取よ
児の手がしとの
鎧ひとつを
なはうらしろを
關の童子が
鳥柴の梅う
紅葉をりく

世の中
ひうれぬる
ふとおもて
かへさまよ
こいうりの
手よどるや
松ならぬ
御園生の

人のとがめぬ
とらむをたつ
かこつ左の手も
秋野よおつる
かるくもらるゝ
聲もくごもる
平氏たふると
ひらきいさらぬ

この君も
想夫戀
志のをれて
松風
伊波胡春よ
志、が谷
よぶ聲の
かゝもなし

(十段)

あな戴星馬の
波をかづきて
蛭小島の
いづらう友を
宿鳥おびゆる
時牛くるへる
世をせむめくる
榮花の夢を

宇治河の
いをもなり
そなちどり
よむざらん
富士野川
俱利伽羅谷
六波羅の
おどろうす

天^{テン}台^{ダイ}山^{セン}の
夕^{ユフ}日^ヒをおくる
舊^{キウ}都^トさびしき
花^{ハナ}さく春^{ハル}よ
月^{ツキ}の御^ミ船^{フネ}の
三^ミ草^{クサ}おろしの
炎^{ホノ}た^ホよふ
生^イ田^タの森^{モリ}よ

どきのこゑ
福^{フク}原^{ハラ}の
四^シ季^キの御^ミ所^{ショ}
こぎうへる
うづねど
ふささて
一^{イチ}の谷^{タニ}
ちる梅^{ウメ}も

簾^{エヒラ}よのこる
波^{ナミ}ももらめく
雲^{クモ}がくれる
扇^{アウギ}のおつる
うらみ暮^クれる
ゆふと^{ユフ}るさ
よもぎが島^{シマ}よ
世^ヨをそむさる

やしまが
矢^ヤさけびよ
日^ヒの丸^{マル}の
壇^{ダン}のうら
磯^{イソ}崎^{サキ}の
龍^{リウ}の宮^{ミヤ}
あ^アとたれて
日^ヒの御^ミ子^コの

ひくりをぬすむ
鎌倉山の
たれう眞實と
ちぎりのたえて
倭文の芋手纏
むうしを今よ
烏帽子なまめく
まひのかしらの

星月夜
かひやぐら
いざししの
倭文手纏
くりうへし
なしうちの
をとこまひ
おもけれバ

四三

(十一段)
あしのかろびて
富士の裾野の
あそれとみずや
千歳をこむる
としなくかゝる
主なき宿を
占よいでる
露のめぐみを

をどりさる
とらうらの
鶴が岡
つまぐしよ
おちがみの
うらへてう
亀菊よ
かけびし

四三

なげ木もたてる
鍛冶がきさふ
かさひひがし
武士よのそむく
君のあさぬ
軍むなしき
からさ宮居を
新島守が

吉備の山
くろがねの
西面の
東夷ぶに
承久の
虚石花貝
隠岐の海
守りむびし

あらしき波風
松の火影
ひろふう錢の
ながれもく瀬も
行脚がくる
露もかゝりて
水穂よすづく
高句麗蒙古の

なごむ世を
てらしつゝ
なめり川
さぶめなき
よしあし
たのみなる
小雀の
よせぬいと

引板ヒダのかけなと
吾妻アヅマよさけふ
とやりごゝろの
暴風ハヤチふきまふ
雲クモもらうづまく
ひうるゝ波ナミの
漉セカイまたつや
とりよとりさる

鳥トリがな
とやり雄ヲの
志シづむれど
博多ハカタの海ウミ
うづしほよ
といめきて
益マ荒雄アラヲが
たぢうらよ

つるぎのたがみ
ひらぶ貝ガイなき
海松ミルメなきさま
から艦ヘから楯カサ
綱手ツナテむなし
思オモひおさびし
さゝら搔カき鳴ナす
法師ホウシがとける

ひしぐれど
浦ウラづゝひ
ゆられくる
から小コ船フネ
かこつ世ヨを
小コ石イシ川カハ
田デン樂ガクの
高タカ履ゲイ子シ
四七

けらくとなく
 ものぐるほしき
 日影もみえで
 笠置よあづむ
 まつきのぼる
 千窟よさうつ
 東魚ついでむ
 たれうちざりて

いぬくひの
 ながめよの
 月の着る
 雨の雲の
 山の岫の
 西馬の
 わらましの
 未来記よ

(十二段)

隠岐の島山
 行手よなびく
 君が御楯と
 秋をたむけて
 ながれいざなふ
 おほらちやまよ
 面影うらぶ
 見えみ見えすみ

いでましの
 草も木も
 たちつらく
 菊水の
 鳳輦の
 のぼれども
 こしうよの
 おぼつうな

般若の箱の
入らぬらぬら
つらねし薫よ
雲のかけとし
わやぶまれつゝ
十字の詩の
足一文字よ
夜よのりてゆく

うごめく
あまがつら
ほごされて
ふみまよひ
お坂よ
かきながら
ふみなして
船の上の

御方を松の
畫がくろ旗の
風よいたへで
稲村が崎
炎をおくる
葛西が谷の
耳よのこりて
なりとよむせよ

けぶりもて
いろくさる
なびきよる
おほひれ
由比の濱
叫喚も
かしましく
さらがへり

弓^{ユミヤ}箭^ヤまゝとる
みやこの春^{ハル}の
柳^{ヤナギ}さくらを
錦^{ニシキ}おりなす
風^{カゼ}まらうせて
人のこゝろの
ととよたゞよふ
登^{ノボ}るとかひの

延^{ヒキ}元^{ゲン}の
甲^{カウ}胃^{チニヤ}の
こきませて
とよあしの
をれうへる
うき雲^{クモ}の
比^ヒ叡^エの山^{ヤマ}
みえぬ世^ヨを

かねてかくとや
うき瀬^セまたちて
かへらぬ道^{ミチ}よ
仇^{アタ}波^{ナミ}ささむぐ
緑^{キナンド}へぶつる
千重^{チヘ}かさなりて
みえずなりゆく
まゝとよたゞよふ

みなと河^{カガ}
ゆく水^{ミヅ}の
おりよて
兵庫^{ヒヤウゴ}の海^{ウミ}
雲^{クモ}霧^{キリ}の
丸^{マル}重^ヘの
くらまぎれ
木^キ枯^{カラシ}を

あらしひうねて
たてる三木
今のこらぬ
う木よまじれる
おほしつてゐる
吉野法師が
まづつさならず
とどちの鮒の

都方よ
一草も
世の中
すめる木を
大和のや
食議よも
金崎
あざとひを

側見よのあらぬ
水乞馬の
齋うらさびて
秋のさうえぬ
臥龍の夢の
水練乗毛の
ゆきもやられぬ
船よもそよぐ

松山よ
なきうとす
かれがさの
藤島よ
さめながら
つけすまひ
陸奥の
仇の風

安濃津アノツのいづこ

つひよさめねど

松マツの常磐トキハよ

名ナもかぐとしき

孫枝ヒコエのほふ

花ハナのすぎよし

庭ニハの教チシの

ちゝといなうぬ

船フナ酔エヒの

おきな

いろかへぬ

くすのきの

吉野ヨシノ山ヤマの

櫻井サクライの

見すれねど

みのむしの

簀シ代シロ衣イロモ

せくといすれど

志シがらみうねて

そよや、如意輪ニヨイリが

こゝろよかけて

かねておもへば

寄方ヨルベの水ミヅよ

影カゲのみのこる

そでせをみ

あさなみを

とる征矢ツヤの

たまごすき

かへらじと

あづさアヅサ弓ユミ

うつろひし

過去帳クワコの

むなしき^{カズ}敷^{カズ}を

四^シ條^{テウ}繩^{ナハ}手^テの

(十三段)

頰^{トミ}よきえ^{トミ}る

晚^ホ照^{テリ}さびしき

まづあふがるゝ

雲^{クモ}居^イの庭^{ニハ}の

えびす^{エビ}す^スころも

さらめ^{サラ}き^キと^トる

かぞへ^カる

ゆづ^ユく^クひ

行^カ宮^{ミヤ}の

めう^{メウ}つし^{ツシ}よ

北^{キタ}の御^ゴ所^{ショ}

せま^{セマ}けれ^レど

佩^ハく^ク太^{ダイ}刀^{トウ}の

花^{ハナ}の御^ゴ所^{ショ}

か^カげ^ゲる^ルふ^フの

室^{ムロ}町^{チヨウ}の

富^{トミ}草^{クサ}よ

いな^{イナ}こ^コま^マる

白^{シラ}拍^{ヒヤク}子^シ

猿^{サル}樂^{ガク}う^ウ

よ^ヨび^ビな^ナれ^レて

折^{オリ}烏^ウ帽^{ボウ}子^シ

水^{ミヅ}の芽^メに^ニる湯^ユの

冬^{フユ}さ^サへ^ヘまた^タつ

春^{ハル}の^ノど^ドう^ウなる

す^スぐ^グく^クいな^{イナ}む^ムし

麻^マ呂^ロの^ノ田^{デン}樂^{ガク}

殿^{テン}上^{シヤウ}人^{ヒト}の

阪^{バン}東^{トウ}齋^{サイ}を

か^カい^イむ^ムる腰^{コシ}の

まぶらふ着ても
ひらひらあはむ
よるべなきはの
つなきもとめぬ
むすぶかゝなき
かじけのみゆく
世をうつせみの
ゆふべのまゝぬ

あらたなる
としなみの
捨ステ小チ舟フネ
玉タマの緒イタの
かゝいと
ちゝるむし
音ネなきて
ひとむしの

志をしやすらふ
ひとつひうりの
世ヨのふつなく
なりナリなりや
月ツキのみちうけ
風カゼのあしさへ
都ミヤコの空ソラよ
かるびあがれる

天アメのノ下シタ
てらせども
三ミ乗ノリの
四ヨ絃シタの
さぶめなく
みざれての
たつ塵チリも
雲クモのノ上ウヘ

星のくらゐり
さすもかひなき
笠のむけの
ときよのみとく
荆棘がもとよ
生くとしもなき
ふみしづきゆく
とさむりひろき

影さびて
三笠山
黒髪
徳政の
あをびれて
氏草を
こまにしき
大路よも

身を袂布の
節のみみもる
とけぬみづれよ
年の緒ながく
東西軍も
空にたゞよふ
月代掠ふ
兜もおちて

さゆみなる
絳緑の
むすばれて
うちとへし
やみがさの
雲の原
よむひぼし
飛火野の

末黒スツロのすゝき
葎ヨシ筆アシ志シげル
箱ハコ根ネおろしシよ
雲クモとト心ココロしシりテ
影カゲさサへヘ志シづク
河カハ中ナカ島ジマの
さらサめメきキおオつツる
畏クラ頭カビのノ袖ソデよ

つツのノぐグめメが
尾オシ柄ガラや
志シぶブるル
河カハ越エヒのノ
信シ濃ノなナるル
あアさサばバらラけ
秋アキのノ霜シヨ
たタまマれレどドも

うちウチのノさサらラをヲぬ
身ミをヲ鴛ウツ鴦サのノ
翅ツバサもモそソぼボつ
船フネ見ミせセをヲ
楳カサのノ音ネもモせセぬ
いイつツきキすスるル
つツひヒよヨひヒきキて
罪ツミのノさサえエせセぬ

つツるルぎギをヲの
そソをヲぶブつツる
雨アメもモよヨよ
よヨをヲへヘどドも
いイつツくク島ジマ
陶タウ物モノのノ
鞆タウ逆ギャクのノ
未ミ来ライ劫キョウ
六五

(十四段)

非^ホ天^{テン}がさけぶ
蓮^{レン}華^カの紅^{ベニ}蓮^{レン}
弘^{クワ}誓^{セキ}の海^{ウミ}も
涅^ニもそめふる
我^ワがたつ杵^シも
他^タ力^{リキ}をたのむ
阿^ア彌^ミ陀^ダが峰^{ミネ}も
奈^ナ落^{ラク}よおつる

妙^{メウ}法^{ホフ}の
大^{ダイ}紅^{ベニ}蓮^{レン}の
濁^ニ江^エの
墨^{スミ}染^{シメ}の
おほさねの
名^ナ號^{ガウ}の
くづれての
修^{シュ}羅^ラ道^{ダウ}の

如^コ法^フ間^{アン}夜^ヤの
をてもこのもよ
ふきとらひふる
そよく機^{ハタ}を
持^カのみざれを
あやめづらしき
御^ミ衣^イおりなす
ふむら機^{ハタ}躡^キの

桶^ク狭^ハ間^マ
雲^{クモ}霧^{キリ}を
尾^ビ張^{ハリ}風^{カゼ}
織^{オリ}田^ダなれや
くりうへし
衰^シ龍^{リウ}の
織^{オリ}復^{フク}よ
まねうねど

眞^シ志^イのほむら
煙^ケを^テとらむ
ほのさる空^ソを
雁^カの使^ツの
細^ホ谷^タ川^カの
むすべバ泡^ア緒^ワ
をちうへりくる
すいめあさりて

もえふてバ
本^ホ能^ノ寺^ジ
うちさふる
吉^キ備^ビの山^{ヤマ}
帯^{オビ}と^トけ^ケて
たぎつ瀬^セの
すゝみぶら
やまぶさの

巢^ス山^{ヤマ}のねぐら
ぬすふ日^ヒ雀^ガ
開^セ緒^キするつゝ
春^ハにかづらく
いむる駒^コの
たちてつまづく
賤^シが手^テよとる
縁^イのそつれも

くらぶみ
栗^ク栖^ス野^ノよ
佐^サ保^ホ姫^{ヒメ}の
柳^ヤが瀬^セよ
たつがみも
賤^シが^ガ嶽^{ダケ}
学^ナ手^マ纏^{マキ}の
をさまりて

峰の回ミネノマヅリの

めぐればいつる
 春ハルのどうなる
 畑ハタケもる男ヲが
 くのめづらしき
 みゆきの庭ニハよ
 大和ヤマト錦ニシキの
 あうきこゝろを
 神カミもちうひて

まふつもり
 つゑまつく
 いでましを
 志シさしまの
 となもみぢ
 あらひとの
 手テ向ムカ草クサ

さげいでたる
 よそほひおもき
 軽カサくまつさる
 三葉ミツハあふひの
 なにもろこしを
 露ツユもすれぬ
 罪ツミのむくい
 のりぐちよひく

うめさちの
 おもづりよ
 つらうづら
 もろとぐさ
 あぶし野ノの
 弘ヒロ安ヤスの
 くつとづら
 こまらどが

うつや飛礫の
いしく、仇よ
弓張月
四百餘州も
ありりもてゆく
なにとの三津の
筆分小舟
なづみがちなる

さゝれいし
かへし矢の
影おちて
くらむ世よ
八洲よ
蕨の子も
さとりおほみ
東海道

七三

(十五段)

吾妻男が

ねらふ火串よ
敷そとりのく
雨も日頃を
ながれよりくる
うなみさなみを
せけわあふれて
みかさよかへる

射翳たて
よる鹿の
夏山
ふる河の
落合よ
開が原
みなもとの
江戸川や

七三

みなぎる水ミヅの
つくく鐘カネを
佛ホトケの胸ムネよ
月グワツ輪リン觀クワンよ
影カゲのみえじと
入ヒトのこゝろを
あさればよどむ
夜ヨ殿ドシの夢ユメよ
た、ひ來キて
大ダイ佛ブツの
むすぶ手テの
にこりさる
駿スル河カなる
くみうねて
淀ヨド川ガハの
おそこれて

によびつゝつく
ゑくばなまめく
桔キ梗キヤウ刈カハル萱カヤ
うらみ大城オホキの
ほりよほりさる
よぼろがとつる
大オホ坂サカ山ヤマの
つひよくづれて
つらづゑの
女メ郎ヲ花ハナ
葛クズの葉ハの
いろくさの
鐵クハよぼろ
土ツチ塊クレの
峰ミネも尾ヲも
たひらぎの

かひのひろへど
むしゝれぎぬの
かくれてむすぶ
いさひこめなる
いさを掻き鳴す
齋すめろぎの
雲居のよそよ
小簾ひさまもの
むれうらの
かくれ笠
ひもろぎよ
ひめぐとの
すがらきの
神なれや
へびてなる
まゆごもり

中心の縁の
妙よあやつる
くいつまとしよ
鬼も佛も
野伏山伏
ひく神樂の
秋野の敷よ
からうみらふよ
一人して
傀儡の
とやされて
まふくの
すかけよ
をうとくさ
いらぬ身も
枯萩の

さやぎふちふる
もらくう露ツユの
さけばまふちる
みづれううふ
とやくみいでし
月ツキう鬼オニ火ヒう
海路ウミヂけさしき
おけばたふふ

天アマ草クサの
たまふさ
世ヨの塵チリの
天テン文モンふ
みうぼし
不知シラヌ火ヒの
神カミの道ミチ
種子タネが島シマ

さすやかるうの
ふみておどろく
とむしりつきし
あとのこれる
誰タレはるもうよ
法イフのつふへし
行手ユキテをぐらさ
鰐ワニも野ノ槌ツチも

輕カル足アシふ
うまざくり
ひちりこの
葡ポル萄ト牙ガル
外ト國クニの
暮露ボロがゆ
海ウミ山ヤマの
すむつうり

にがりてみれば
堅さりのもろず
道よ莫來の
すゑよすゑなる
寺主の竹の
かしてき節も
よゝをこめなる
つくろすがるう

華^{アツ} 籠^{カニ} の^ハ
横^{ヨコ} さ^ら ふ
關^{セキ} 守^{モリ} を
寬^{クワン} 永^{エイ} の
園^{エン} 生^フ よ
あるもの
杖^{ツヅ} 代^{ダイ} の
武^ム 藏^{ゾウ} 燈^{アツミ}
籠^{カニ} の

こゝろよかけて
こまほしげなる
となりかくなり
端^{ハシ} 居^イ してきく
由^ユ 比^ヒ の 濱^{ハマ} 風^{カゼ}
荒^{アラ} 磯^{イソ} よみえて
とればなみよる
たゞ影^{カゲ} をのみ

やましるの
瓜^{ウリ} つ^く り
鳴^ナ 雷^{カミ} も
君^{キミ} が 代^ヨ よ
ふくかひも
手^テ も た^も く
帝^{ハク} 木^キ の
鳥^{トリ} 部^ベ 山^{ヤマ}
八二

けふりをさめて
春をさへづる
見れ木の花の
待乳の山の
隅田河原の
ちしほそめなす
色もますほの
薄がまねく

八二
鎌倉の
うぐひすの
さうえのみ
夕こえて
雪の夜よ
呉藍の
赤穂なる
魂よむひ

よべべこふふる
よそよのきうぬ
魂魄たづぬる
穂ああらされて
雉子なく野の
學問の道も
雪よ・ホタル
世の太平の

八三
天彦も
曼樂も
真心の
深雪馬
ひろければ
かつみえて
かひやける
海津路も

おもひやかけし

騷サワギを三津ミツよ

(十六段)

八島ヤシマ士奴美シヌミの

あるしありやと

さめば落オチといふ

國クニ來キ國クニ來キと

ひけばけぶりも

海ウミのおもても

おほしほの

すみなれて』

神カミ語ゴトを

刺ミカ栗クリの

山ヤマ姫ヒメも

引ヒキ眉ヒヅメの

くるふねも

あこみ来て

波ナミの總ホの

ほどこそあれ

おとなひも

さめながら

あうすがよ

たどられて

さまよへば

大オホ島シマも

くねりあがれる

天ソラにそびゆる

くづれおちくる

むらしの夢ユメの

夢野ユメノよたてば

もと来キし道ミチも

世ヨを海邊ウミベよ

なごろのさびぎ

小島もとよむ
 八十氏入の
 おもひをうれて
 香をとめてくる
 いつよのあらぬ
 ちりばふ庭の
 わな卵の花の
 たへぬ雲居の
 八十島の
 やちまふよ
 たちをなの
 櫻田の
 むつの花
 雪見草
 ふいさよの
 星まよひ

昂星のむつぶ
 さやうよおつる
 薩摩の瀬門の
 わふれおちあふ
 乗りなやみさる
 あづまうらげの
 内外ふさがる
 ぬくかこもなき
 魚子の
 長門の海
 高潮も
 志ほさるを
 吾妻船
 ふさまふの
 無戸室の
 戸無美山

獵夫サツチよあふり
 木末コノエとなれて
 とべづつまづく
 うつぶさいでて
 うくればとじる
 御坂ミサカの相模サガミ
 野守ノモリのかいみ
 行方ユキヘさぶめぬ
 鳥羽トバ伏見フシ
 おほさうり
 泛ワタ船フネの
 あしがらを
 武藏野ムサシノの
 かげさえて
 逃ニゲ水ミヅの

(十七段)

上野ウヘノよたまる
 終ツヒよかくれて
 みえずなりなる
 こよ、真マ進シメ國クニ
 豊トヨ葦アシ原ハラの
 ふさ、びあふぐ
 ひうりもたうき
 たてるの瓊ユキ矛コ
 よどみさへ
 箱ハコ館ダンも
 内ウチ木キ綿ワタの
 さきとひを
 ひとくさの
 高タカ千チ穂ホの
 日ヒの本ホトよ
 くとし矛コ

千足チタルの國クニの
何ナニもたぐへん
猛雄マウナがとるや
けふるにはひの
むうしがふりも
さけがこゝろよ
初背ハツセの駒コマも
草クサよのあらぬ

雄々ヲしさり
益荒雄マスラヲの
燒太刀ヤキタチよ
ほのうなる
きゝなれて
こもりくの
荷ニなふてふ
きみの穂ホの

九〇

君キミよつうふる
ふさよとらみて
秋アキの田タの實ミの
おもひをするな

眞マコトこゝろの
うなるぶす
おほろうよ
おめサナハチ髪カミ髪カミ

〇

九一

世繼の歌とむり

明治二十八年一月二十九日印刷
明治二十八年同月同日發行

發行兼
編輯者

東京市麹町區飯田町五丁目八番地

國學院

代表者

青戸波江

社六番地

近藤圭造

印刷者 全

印刷所 全

皇典講究所印刷部

